



ほり え くわ じ ろ う
堀江鋏次郎

幕末日本
初期写真術の先駆者

6月1日は「写真の日」。毎年、栄町の四天王寺墓所で、幕末に伝来した写真術の研究と発展に寄与した堀江鋏次郎の顕彰供養が続けられています。

彼は江戸詰の津藩士で、幕府が開設した長崎海軍伝習所へ安政4(1857)年に派遣された留学生のひとりです。ここで地元長崎の上野彦馬と運命的に出会って意気投合し、独自に写真術研究を始めます。しかし、成功には程遠く、彼は藩主の藤堂高猷とうどうたかゆきに150両もの高価な最新カメラ機材一式の購入を願い出ます。万延元(1860)年、最新カメラを手にした二人は藩主の命で江戸に向かい、藩の屋敷で藩主や来客の諸侯や旗本を毎日毎日撮影しました。文久元(1861)年、二人は藩主の帰国と共に津に来て藩校有造館で舎密学せいみがく(化学)を教え、解説書も共同で作りました。翌年刊行の『舎密局必携』と題する書物は、二人が研究した写真術の内容が含まれています。出版後、上野彦馬は故郷長崎に帰って日本初の職業写真家として撮影局を開き、後に「日本写真界の祖」と呼ばれるほどに名声を高め、一方の堀江は幕末に起った天誅組てんちゅうぐみの乱の鎮圧に派遣されるなどして藩士としての務めを全うします。

慶応2(1866)年、堀江は36歳の若さで病没しました。その若過ぎる死ゆえに、彼が上野彦馬と共に発展の礎を築いた写真術が津に定着しなかったことは今となっては残念と言わざるを得ません。

(「広報津」平成22年6月1日号)



堀江鋏次郎墓碑(四天王寺)